

# 今、田村明を読む

横浜市立大学 まちづくりコース  
コース長・教授 鈴木伸治



## 田村明の著作①



横浜市役所時代  
『都市を計画する』  
1977/岩波書店



法政大学時代  
『都市ヨコハマをつくる』  
1983/中公新書

## 田村明の著作②



法政大学時代  
『まちづくりの発想』  
1987/岩波書店



地域政策プランナー時代  
『まちづくりの実践』  
1999/岩波書店



地域政策プランナー時代  
『まちづくりと景観』  
2005/岩波書店

## 田村明の著作③



法政大学時代  
『イギリスは豊かなり』  
1995/東洋経済新報



地域政策プランナー時代  
『「市民の政府」論』  
2006/生活社



地域政策プランナー時代  
『都市プランナー田村明の闘い』  
2006/学芸出版社

## 田村明の著作④

- そのほかにも、数多くの単著、共著、雑誌等への寄稿論文が存在する。
- その中から田村明の思考の軌跡をたどることはできないか
- その背景にある田村明の思考の源は何か？
- その人生、時代背景、氏の業績も含めて改めて考えてみたい。

## 信仰者としての田村明



- 無教会派キリスト教徒
- 矢内原忠雄、黒崎幸吉らの聖書研究会に参加
- 田村家では聖書研究会を月に一回開催するが明が司会を務めることが多かった。
- 特定の個人の影響はどうか
- 内村鑑三著「後世への最大遺物」を終世大事にした。(夫人談)

## 内村鑑三とその周辺



内村鑑三



広井勇 (ひろいさみ)  
内村とは札幌農学校同期生  
小樽築港の伝説的エンジニア



青山士 (あおやまあきら)  
内村の薫陶を受け  
土木技術者を志す。

「萬象ニ天意ヲ覚ル者ハ幸ナリ」、「人類ノ為メ 国ノ為メ」(青山士)

## 『後世への最大遺物』

- 明治27年箱根でのキリスト教夏季学校の講演録
- (最大遺物とは) お金、事業、思想、著述
- ……私が考えてみますに人間が後世に遺すことのできる、ソウしてこれは誰にも遺すことのできるどころの遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるかならば勇ましい高尚なる生涯であると思います。これが本当の遺物ではないかと思う。……

## 都市計画と組織

- 「地域計画機関のあり方について」(1962)
- 環境開発センター名で印刷された小冊子

地域計画機関のあり方について

1962年

著：田村 博

環境開発センター

RESEARCH CENTER FOR ENVIRONMENTAL DEVELOPMENT & DESIGN

## 「地域計画機関のあり方について」より

- 「これから如何なる仕事をすべきか・・・地域計画、都市計画を単なる建築あるいは土木、造園技術の外延の拡大とせず、それらと接し、あるいは重なり合いながら、地域という特定の対象の下に、他の基礎的条件たる経済的、社会的分析、更に法制技術、経営技術をも総合的に駆使して新たなる独立の分野として確立しようとするものである。(2p, 118-24)
- 東京大学都市工学科設立が1962年、建築学科の丹下研究室は都市工学科へ移る。

## 「地域計画機関のあり方について」より

- 複数のプランナーからなる組織を構想
  - 地域プランナー
    - 専門プランナー
    - 総合プランナー
  - 専門スタッフ
    - 「従来の科学、技術のこれに関する専門家」
  - 各実施担当機構
    - 「個別計画となった場合直ちにこれを実施に実現できる機構と直結していることが望ましい。」
- 後に入庁する横浜市企画調整局の組織イメージを明らかに重なる
- その後の自治体プランナー論への展開



## 田村明にとっての 後世の最大遺物は？



## 『後世への最大遺物』

- 明治27年箱根でのキリスト教夏季学校の講演録
- (最大遺物とは) お金、事業、思想、著述
- ……私が考えてみますに人間が後世に遺すことのできる、ソウしてこれは誰にも遺すことのできるどころの遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるかならば勇ましい高尚なる生涯であると思います。これが本当の遺物ではないかと思う。……

## 『後世への最大遺物』より

- しかれども種々の不幸に打ち勝つことによって大事業というものができる、それが大事業であります。それゆえにわれわれがこの考えをもってみますと、われわれに邪魔のあるのはもっとも愉快なことであります。邪魔があればあるほどわれわれの事業ができる。勇ましい生涯と事業を後世に遺すことができる。

## 『後世への最大遺物』より

- とにかく反対があればあるほど面白い。われわれに友達がない、われわれに金がない、われわれに学問がないというのが面白い。われわれが神の恩恵を享け、われわれの信仰によってこれらの不足に打ち勝つことができれば、われわれは非常な事業を遺すものである。われわれが熱心をもってこれに勝てば勝つほど、後世への遺物が大きくなる。

田村明にとっての人生の最大  
遺物は膨大な著作物であった  
かもしれません。

ご清聴ありがとうございました。